
死体コレクター 4

エビのしっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死体コレクター4

【Zコード】

Z0291B

【作者名】

Hビのじつぽ

【あらすじ】

私は、眞実を知りたいだけ。僕は、集めたいだけ。ただ、それだけ。

(前書き)

前作を読んでくださった方、感想を書いてくださった方、本当にありがとうございました。それこそがわたくしの活力であります。さて、今回、長めです。脳、フル活動です（笑）。

……
眠い。

瞼を開けて、窓の外を見る。

空にはすでに、高々と太陽が昇っている。

いつのまにか眠ってしまったようだ。

日の前のノートパソコンに視線を向ける。

『都内で相次ぐ謎の連続失踪事件について』

これが徹夜の原因だ。

ここ3～4年の間に、同じ地域で、何人もの行方不明者がでていた。

4年間に19人。これは明らかに異常な数字だった。

このうち2人は、家出と、借金を苦にした自殺であった。

しかし、それを差し引いても17人。そのどれもが原因不明で、所持品すら見つかっていなかつた。

失踪者は全員女性だが共通点は無く、年齢にもばらつきがあった。

女子高生もいれば20代後半の女性もあり、生活環境や出身地もまったく関連のないことから、同一の事件とは考えにくかった。

なにより死体が見つかっていないので、家族が訴えても、警察は、まるで相手にしなかつたようだつた。

しかし私は、これらの出来事にとても興味をそられたのだった。
この17人には絶対に、なにかある。

記者の血が騒ぐ。

調べてみたい。
真相を突き止め、このことを記事にしたい、と思つた。

今日も素晴らしい天氣だ。停車したままの外車の運転席から、空を眺める。しばらくして、後部座席に女が乗り込んで來た。

「支社までお願ひ。」

少し強めの口調で女が言つ。今日は少々機嫌が悪いようだ。

「今日は本社じゃないんですか?」

「いいのよ。 に行つて頂戴。」

さらに強めに女が答える。やはり機嫌が悪いようだ。これ以上口

応えるのは良くない。

「わかりました。」

僕は車を走らせた。

女は、電話相手に少し怒鳴り気味に喋つている。おそらく本社の重役、もしくは支社長だろう。さすがは実力主義の敏腕女社長だ。その運転手をしている僕は、もしかするとけつこうな立場なのかも知れない。

ハリー越しに女を観察する。

三十代前半。なかなか整つた顔立ちをしている。

全国にある支社をまとめ上げる女社長。

僕の交際相手。

…そして、僕が『まだ持っていない肉体』。

いざれ手に入る。

いざれだ。

「今日は散々だわ。」 女は言つ。

「もう二日もありますよ。」

相槌をうつ。

「私つて、冷たい女なのかしら。」

女のテンションが下がる。

「社員の一部が、私のことを『鉄女』とか『女王』とか陰口を言つてゐるようなの。」

…まあ、無理もない。優しい口調なのは僕の前だけで、ほかの人には厳しい。鉄女と言われても仕方がない。

しかし、正直に言つことはできない。

「確かに、中にはそんなことを言つ社員もいるかもしませんけど、本当に会社のことを考えている人なら、社長のことをわかってくれると思いますよ。」

少し黙つてから女が言つ。

「あなたはどうちかしら?」

「言わなきやいけませんか?」

支社に着くと、彼女は少し上機嫌で車を出でいった。

「また後でね。」

別れ際に女は言つた。

……そう。またあとで。

その時こそ、彼女は僕の『コレクション』に加わるのだ。

気がつくと、誰もいない車内で、僕は静かに笑っていた。

失踪した女性たちの自宅付近の聞き込み始めて数日後、失踪した中の一人が、いなくなつた当日に居酒屋に行つていたことを突き止めた。

居酒屋の主人が、彼女に話しかけていた男を目撃していた。

男は、彼女と3時間ほど会話をしたあと、彼女と一緒に店を出ていつたといふ。「どんな話をしましたか?」

「確かに…女の子のほうが一方的に喋つてたかな。男の子のほうは相槌うちながら、ずっと話聞いてるだけだったよ。」

「ほかには何か言つてました?住んでる場所とか、趣味とか。」

「ああ、そういう男の子が『家から海が見えるんですよ』とか言つてたかな。

あとは、『僕には人とは違う趣味があるんだ』とか女の子に話してたよ。」

…海。

この辺りだと湘南だらうか。きっと、彼女を家に連れて帰つたに違ひない。

とつあえず明日は湘南へ向かつてみることにしておこう。

…必ず見つけやる。

残念だ。とても残念だ。

結局、あの後彼女は家には来ることはなかった。
やはり社長というのは忙しいのだろう。

彼女もとても残念そうで、何度も謝っていた。

まあいい。今日のところは諦めておこう。

僕の『趣味』に加えるのは、また次の機会だ。

……、

今日の所は『集める』のを我慢して明日こそなえて眠りにつくか

。

……、

僕の日に叶づ、『コレクション』を探しに行くか。

。

この葛藤する時間も、僕の『趣味』の愉しみのひとつ。

翌日、私は湘南を訪れた。

居酒屋の主人の話で、大方の人物像がわかった。

痩せ型、背が高く、髪は黒。

身なりがよく、清潔感漂い、気品がある。

年齢はおそらく二十代で、真面目で優しそうな感じ。男前。

そして、海の見える家に住んでいる。

ここまでわかつていれば、すぐに見つけることができるだらう。

ここまでよくできた人物はなかなかいないし、何より私は記者なものだから。

その人物の自宅は、思っていたよりずっと早く見つかった。

男は、近所でも風当たりのよい、好青年だったからだ。

男前で好青年、しかも有名大企業の社長専属の運転手。どれをとっても完璧である。

私は、今更ながらに思った。

本当にこの男が事件に関係しているのだろうか、と。

とにかく、全て本人に会つてからだ。
もうすぐ男が帰つてくる。

真実がわかるのは、その時だ…。

帰宅してみると、玄関の前に見知らぬ女性が立っていた。

女は記者だと言った。

一瞬僕は身構えたが、冷静になり、彼女を家に招き入れることにした。

よく見ると、僕の手に入れていない『軀』だった。

彼女をリビングに案内しながら、僕は心の中で興奮していた。

本当に彼が事件に関わっているのかしら？

さつきも、記者だと名乗つても躊躇ひひとつしなかつたし、私をすんなり家に招き入れてくれた。

彼は想像していたよりも物腰がやわらかく、本当に好青年で、見るからに優しかった。

失踪事件の重要人物でなければ、付き合いたいぐらいだ。

しかし私情は禁物。

私は毅然として、彼に質問を投げかけた。

「数ヶ月前、 という居酒屋に行きましたね？」

「はい。」

「そこで、町田 嘉代子という女性に会いましたね？」

「……ああ。はい。」

「そのあと、彼女を『エリ』と連れて行つたんですか？」

「エリです。」

「それで、どうしたんですか？」

「そのままですよ。」

「…………は？」

「そのままよ。『彼女』『エリ』と云ふよ。」

「エリですか？」

「エリです。地下。」

私は何を言つてこるのかわからなかつた。

「『エリ』ですか？」

「口で言つより、見る方が早いですよ。
見ますか？」

なんのことをかわらないが、そこに彼女が住んでいるのだらうか。

しかし、何故地下に…。

私は、不審に思いながらも、彼について行くことにした。

真実を知るために…。

地下室への道は暗く、心なしか寒かった。

…真夏だといつのこと。

「いいです。」

その扉はいかにも頑丈そうで、潜水艦の水密扉を思わせた。

「どうぞ。」

そう言われて、私は扉に手をかけた。

低くうめく取手。

そして…、扉が開いた。

中は薄暗かつたが、そこに置かれている物が何かは、良くわかつた。

戦慄。

悲鳴。

後頭部への、衝撃。

そして私は、ここに住人となつた。

「ここは暗くて寒いけど、寂しくはない。

トモダチがたくさんいるから。

向かいに座る『三体田』を見つめながら、

彼女は思った。

僕は目覚める。今だに僕は、満足感で心がいっぱいだ。

シャワーを浴びてバスルームから出ると、携帯に電話がかかって

朝。

「はい。あ…社長。」

「今夜だけど、空いてるかしら？」

「はい、大丈夫です。」

「じゃ、今夜家へ行くわね。」

「はい。たのしみにしてますよ。」

「私も。愛してるわ。」

僕の『趣味』は、
まだまだこれからだ。

朝食を食べながら窓の外を見る。

雲ひとつない、青空。

いつのまにか、僕の顔はかすかに笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0291b/>

死体コレクター4

2010年12月13日22時59分発行